深達度Mの Signet ring cell carcinoma

安川覚、柳澤昭夫

組織型 signet ring cell carcinoma の胃癌は実際の病理組織診断時によく遭遇する。
ただし、最近未分化型癌は、深達度 M などの早期癌症例において取り扱いなどに
注意する必要性も生じてきた。組織型はいわゆる common disease に相当するものだが、
まれな出現形式で示唆に富む症例を提示する。

症例１：６０歳代女性

既往歴：２年前右乳癌全摘（T2,N1,M0: 化学療法施行）

経過：乳癌の follow up の血液検査異常のため、GIF 施行。内視鏡的には IIa
疑い。病理組織学的には、tubular adenoma などを疑わせる分化型
異型管状腺管の増生が表層付近にみられ、粘膜固有層深部を主として
signet ring cell carcinoma がやや広範囲にみられた。２つの組織型が
併存した深達度 M の腫瘍であった。一見、adenoma などの分化型腫瘍のみと
診断しがちだが、signet ring cell carcinoma を伴っていることもあるので
注意して診断すべき症例であった。

症例２：４０歳代男性

経過：前庭部前壁に肉眼型 Type2 で大きさ 3cm、深達度 SS、組織型は por2>sig の腫瘍が
認められ、幽門側亜全摘された。断端陰性。その約２年後、残胃に広く多発性に
深達度 M、組織型は signet ring cell carcinoma の腫瘍が認められた。多くの
箇所で腫瘍が既存の腺管頚部から発生することを示唆する組織像も認められた。
singnet ring cell carcinoma の発生を考えさせられる症例であった。